

排すべき“閉鎖性”

各 位

野 田 一 夫

日本経済新聞朝刊の「私の履歴書」を読んでおられますか。現在の執筆者は日野原重明博士、国内はもとより世界的にも広く知られた医学界の重鎮です。茅誠司先生のあとを継いで小生が理事長職にあるシンクタンク、即ち日本総合研究所の理事にこの程日野原先生が就任されたご縁で、今週の月曜日夕食をご一緒に、実際に興味ぶかいお話のかずかずを伺うことができました。

「…医学部の教授は医学部出身者だけ、しかも、一流を自負する大学では、その大学の医学部出身者しか原則として教授になれません。日本の医学界のそうした閉鎖性が、医学や医療技術の進歩の最大の障害なのです。欧米の一流大学の医学部には、その大学の医学部出身ではない教授がザラにいますし、さらに、医学部でない学部出身者が教授をしていることだって、別に例外ではないのです…」と、先生は嘆かれました。

狂犬病等の治療法を開発して医学の発展に不滅の貢献をしたパスツールがもともと医者でなかったことも、私ははじめて知りました。彼の関心は最初は物理学から化学へ、そしてやがては微生物学へと移っていったとのこと。彼が醸酵の研究を通して微生物の自然発生説を否定し、近代微生物学の端緒をひらくとともに、免疫学を大きく発展させえたのも、こうした経歴と自由な研究態度の結果といえるのです。

そういうえば、キャノンの創業者御手洗毅氏も、「ひとひらの雪」や「うたかた」でわれわれ中高年読者の心を酔わせる人気作家渡辺淳一氏も、れっきとした医学部出身者です。わが国では、なぜ医学部出身者でない人材が医学の世界で活躍できないのでしょうか。多摩大学の経営情報学部出身者の中から、将来“経営”や“情報”以外の分野で活躍する人材が続々輩出してこそ、本学の教育が成功したといえるのではないでしょうか。

ネットワーク・パワー

各 位

野 田 一 夫

大学づくりや大学運営に日常的関心と時間を奪われるようになって久しく、本業であった企業経営の分野での情報の収集・分析あるいは文献の渉猟とはすっかり縁遠くなってしましましたが、毎年9月から10月にかけては別です。まだ日経経済図書文化賞の審査員をしている関係から、この1年間に出版された注目すべき経営書に集中的に目を通さざるをえないからです。自分では本を書かなくなつた身で、他人が丹精こめてまとめられた著作の評価をする矛盾をしきりと心に感じながら……。

それに、困ったことに、受賞候補作品を読みながらも、随所で多摩大学の現状や未来についてのヒントや共鳴点に関心が自然にひきつけられてしまうのです。たとえば昨夜は寺本義也氏の「ネットワーク・パワー」(NTT出版)を読みふけりながら、私自身がかねてから構想し提唱している“リーグ制総合大学”的ことを考えつづけました。世界中の大学の歴史で恐らく誰も考えつかなかつたこの形で“総合大学”が誕生すれば、好奇心の旺盛な寺本氏はそれをどう評価するか今から楽しみです。

いうまでもなく、“ネットワーク”的概念は、変化を常態とする経済環境に対応する新しい社会的メカニズムとして、内外の一群の気鋭な学者によってここ数年しきりに研究対象とされています。しかし重要なことは、この概念より先に、先進国の経済社会では例外なくそれを裏づける現実が生れ、しかも年ごとに歴然と動かしがたい現実となりつつあることです。しかし卒直に申して、わが国ではそうした趨勢は、産業界に偏重して進行していく反面、大学の世界では“古色蒼然”的な時間が流れているのです。私どもがネットワーク戦略を成功させて“リーグ制総合大学”的形をととのえ始めた時、多摩大学は、大学の世界で始めてイノベータとしての評価を確立することでしょう。

3 先輩に脱帽！

各 位

野 田 一 夫

25日、中部大学の徳廣龍男元副学長が本学を訪問されました。名古屋郊外に四半世紀前に誕生したこの大学は、徳廣先生が副学長をされた20年間で見違えるように体質改善され、また発展をとげました。本学に赴任前7年間同大学に籍を置いていた松浦敬紀教授は常々このことを私に強調し、今なお徳廣先生を敬愛して止みません。それだけに先生から伺った同大学の経営・教学上のご苦心談は、ひとつひとつ心に沁みました。

27日、磐梯高原で開かれた「第4回東北会議」のキーノートスピーカーとしてお招きを受けました。東北の望ましい未来を論ずる会議で、出席者は東北7県の産・官・学の第一人者約40名。小生はこの講演のために珍しく猛勉をせざるを得ませんでしたが、その際、とくに東北で進行中の最も魅力的なプロジェクト“東北インテリジェント・コスモス”構想の理解に関し、その提唱者兼指導者であられる石田名香雄先生（東北大学元学長）ご自身から賜った暖かいご示唆は忘れられません。

2日、磯村英一先生（東洋大学元学長）より書翰が届きました。先日先生が産経新聞『正論』に寄稿された「多摩大学の退学勧告について思う事」に対し、小生は極めておだやかに反論（9月21日朝刊）致したのですが、先生は、ご自身の文章の言葉の足らなかった点を率直に認められ、謝意を表明されてこられたのです。早速お電話を申し上げ、失礼をお詫びするとともに、近々の再会をお約束して気持よく受話器をおきました。

学長をしていながら、日頃“業界づきあい”を全くしていない小生にとって、週間回顧に3人の元学長が登場されるのは全く稀有なことです。それにしても、70～80歳の高齢のお三方が揃って矍鑠として今なお第一線で活躍しておられること、これには脱帽のほかありません。

鼓腹撃壊の気分

各 位

野 田 一 夫

先日多摩大学の同僚教授の1人から「動く廣告塔のように…」と冷やかされました。小生はこの半年間，“多摩大学”のことを喋らせててくれるなら、日本中どこにでも出かけました。幸いその効果は予想以上に上っているように思います。先週水曜の夜も、広島市民大学で第8期の開講スピーチをしてきました。

その晩ホテルに帰り、“ドイツ統一”という歴史的ニュースを報ずるテレビに視入りながら、コール首相が早くも「海外派兵が可能となるよう憲法改正に取り組み始めた」という報道に衝撃を受けました。日本人の間ではマスコミを通して「自衛隊を中東へ派遣すべきか否か」という論議が多分中東紛争が終るまでつづくことでしょうが、悲しいかな肝心な政治家たちには、時代への展望、タイミングを見はからっての決断、また関係諸国へのしたたかの根廻しを期待することは、全くできそうもありません。

翌4日の日経朝刊では駐日イラク大使の「軍を送ると資金援助するのとには違ひはない。金しか払っていないから無罪だというわけにはいかない……」という私共への鋭い批判が掲載されました。正にその通り、なぜ日本では、政治家もマスコミも、こういう当たり前のことが解らないのでしょうか。

旅先のつれづれに、珍しく“天下国家”を憂えていた私を慰めてくれたのが、広島の心暖かい友人達でした。キッチンこと吉川英司氏（テレビ新広島副社長）は何と朝5時に雨の中瀬戸内海へ出て、友のために漁師と一緒に天然の魚やエビを捕えてくれていたのです。昼食には近藤英雄氏（同社取締役）も加わり、この豪勢な獲物の料理のほか、とろけるような広島牛と信じられない程大量の松茸のすき焼、地元の“だんご汁”……で全員満腹。小生は前夜来の“天下國家の憂い”もどこへやら、正に「帝力我に何をか有らん」の心境で帰京した次第です。

モスクワ大学 ビジネススクールにて
各 位

中 村 秀 一 郎

本学日下公人教授のお誘いで、9月中旬モスクワ大学ビジネススクールの第1回日ソシンポジウムに参加してきました。日本側の参加者は経営の現場に強い中堅企業の経営者とジャーナリストです。ペレストロイカに関連する外国人主催・参加のセミナーは多いようですが、数人しか出席者のないケースもあるとか。それに対してこのセミナーでは、60名前後のソ連経済第一線の実務家の参加を得て活発な討論に終始しました。昨年創立のこの学校には、伝統ある大学の革新への取組みが感じられます。この学校の理事長でもあるコレソフ経済学部長のシンポジウム冒頭のスピーチは興味深いものでした。

「ソ連経済は大転換期に入っており、①経済的自由原則の実行、②国家的所有の排除、③株式制度・協同組合・個人所有の導入、④上からの指令経済の排除、分権化の徹底、という4つの目標を目指しているが、その歩みはさわめて遅い。ソ連工業生産は45%が産軍複合体に、40%が基幹部門に属し、わずか15%しか消費財に向けられていない。消費者無視の克服こそさし迫った課題であり、さらに世界経済との関係改善、外資導入、インフラの開発などの課題をふくめて、その担い手としてのマネージャー、つまり指令を出すだけでなく、その実行を指導でき、外国の経営のあり方を知り、新機軸を導入しうる人材を輩出することなくして、ソ連経済改革はありえない」というのです。

加えて氏は、产学協同による大学の社会人・生涯教育への取組みは世界的潮流であり、この動きに対応し大学教育を近代化するためにもビジネススクールは必要と力説していました。日本の社会科学系学部に多いマルクス経済・経営学者は、このような動きをどう受止めるのでしょうか。興味あるところです。

モスクワ—何が変ったか—

各 位

中 村 秀 一 郎

今度、モスクワで宿泊したのはメデュナロードナヤホテル、党の迎賓館であったという立派な施設です。ところで、その前を流れるモスクワ河の対岸にはスターリン時代を象徴する建築の一つであるウクライナホテルがあります。じつは1968年、私は海外留学でこのホテルにほぼ1ヶ月間、室内とともに、まさにこの季節に滞在していたことがあるのです。もし20数年間ウクライナで眠り続け、突然この9月に目覚めたとすればどうなるだろうかを考えてみました。多分まごつくことは全くないでしょう。ホテルから中心部に行くとき、よく利用した②番のバスも同じようによごれた車体で動いていますし、街の外見は基本的に変わってはいないのです。

ただ生活のきびしさは増したようです。百貨店グムの売場でモノがあるのはわずか1割程度、その代り食料品の自由市場は立派になることはなりましたが、国営市場価格の5倍の価格では客は疎ら、価格2倍の協同組合の売場には行列が出来ています。昔は、歩行者がネットの袋をもって歩いているのがモスクワの市民生活のスタイルでした。なにかを売る行列があれば、すぐ並んで買うためです。ただ今日ではこのスタイルは見当らぬようです。それだけモノ不足が深刻なのでしょうか。

タクシーも乗りにくくなりました。客を選んでいるのです。シュレメチボ国際空港では荷物を受取るのに1時間待たされました。入国審査官がお前はタバコを吸うかとたずねたりします。以前にはなかった、むしろ第三世界で見かける情景です。社会主義経済にはガタが来て、市場経済はほとんど軌道に乗っていないようです。だが、われわれの接触したソ連の知的社会は本当に明るくなりました。この自由な雰囲気が市場経済の基盤づくりに直結することを願わざにはいられません。

各 位

広報努力空しからず

野 田 一 夫

「この間NHKの『テレビコラム』視たよ。だけど、どうして事前にしらしてくれなかつたの?」とTIMISの読者である友人から電話がかかり、恐縮しました。先へ先へのマスコミの対応に追われ、私自身も、自分の放送を観ていなかつたのです。

「今年の仕事は“広報”だ!」と決意したのは3月です。何しろ、今年の予算を見るかぎり、費用の発生を伴なわぬ広報活動を学長自らが徹底してやる以外には、本学の知名度を高める方法はなかつたからです。マスコミと私とのつきあいは35年になりますが、今年ほど積極的に、しかも特定の問題(つまり多摩大学)にしほって応じつづけた記憶はありません。幸い、その成果は予期以上だったようです。過去8ヶ月間、書籍・新聞・雑誌・テレビ・ラジオとすべての媒体を通して、“広告宣伝”とは全く関係なく多摩大学はいろいろな形で、またくり返し取りあげられた結果、本学は「新しく小さいながら、充実した施設・設備と優れた教授陣・教育方法を誇る個性的な大学」というイメージを世間に定着させることができたようです。

イメージが実態より先行してしまったことにいさか恥じらいを感じはしますが、少くとも来年の入試には価値のある実績に違いありません。そして、本学へのマスコミの関心は未だ衰えていません。雑誌では“退学勧告”といった現象の底にある本学独自の教育理念や教育方法を探ろうとした大型企画として、近刊の月刊「Asahi」(12月号、6ページ)、同「政界ジャーナル」(12月号、14ページ)等があり、テレビでは逆に、本学の教育的試みをニュースとしてより周知の事実として報道する傾向があります。たとえば、日本テレビのニュース(10月31日、午後6時)やNHK「クイズ百点満点」(11月4日、午後7時20分)等です。お時間があれば、ご笑読、ご笑覧下さい。

中国とモナコ

各 位

野 田 一 夫

モナコ、11月4日、日曜日午後4時、快晴・無風。ホテルの私の部屋の窓越しに、夕陽に照り輝く地中海が絵のようにひろがっています。……丁度先週の今日、万里の長城の上の石段に腰をおろし、こころよい小春日和の陽差しを浴びながら、中国5千年の歴史に思いをはせていた自分が、信じられません。

中国、国土面積約960万平方キロ、人口11億人。モナコ、国面積2平方キロ、人口3万2千人。昔から旅好きの私ですが、一週間のうちに世界最大級の国と最小級の国とを股にかけて旅したのは初めてです。北京では、中国の指導者が、経済発展の目論見と決意を力強く語ってくれました。しかし万里の長城がいみじくも示すように、大国には昔も今も、小国には考えられないような悩みと負担が指導者の肩に重くのしかかり、国家繁栄の実績はとうてい一朝一夕には望むべくもありません。

その点小国は、良き指導者を得て国民がその気になりさえすれば、短期間で変身をとげます。19世紀半ばまで、コートダジュールの片隅の一寒村にすぎなかったモナコは、世紀末には、ヨーロッパの上流階級の一大社交場と化していました。シャルルⅢ世の先見と決断によりカジノが導入され、それを中心に、豪華なホテルの建設と海岸の整備が行なわれたからです。以来百年、レジャ一大衆化の時代的趨勢に乗り遅れることなく、モナコは今や、スポーツ、芸術、各種イベント、コンベンション……とあらゆるエンタテインメントを中心とした巧みにそして総合的にとり込み、世界で最も魅力に富む、美しくかつ安全な観光地としての名をほしいままにしています。カジノの収入はモナコの全収入のわずか4%を切ろうとしているとのこと……。

時代の趨勢を察知しつつ常に“卓越した小国”指向の戦略で成功したモナコの歴史は、小さい大学多摩大学にとって無上の教訓を与えてくれます。

Voice 調査委員会

各 位

中 村 秀一郎

多摩大では、この11月、Voice（学生の声）調査委員会を設置し、全講義で、授業に対するアンケート調査を実施することにしました。アメリカの大学で普及している学生の授業評価は、日本の大学では全く実行されていません。ただし例外として、国際基督教大学が一般教育科目に限定してこれを実施（週刊教育89.6.20号）、筑波大学が近く「検討3年激論の末」実施に踏み切ると伝えられています（朝日新聞90.4.12）。

多摩大での学生の声調査は、筑波で考えられているという教員の業績評価、特別昇給、昇格の資料づくりを目的とするものではありません。

我々は、高い授業料を払って教育サービスを購入する学生は、いわば消費者であると考えます。企業は、消費者からの声を受けつける消費者部門を設け、自社製品やサービスへの消費者の反応を聞き、その改善に役立てています。また、大学の消費経済学やマーケティングの講義では、そうすべきだと説いています。とすれば、大学だけが例外というわけにはいかないはずです。もちろん企業の場合でもそうであるように、消費者の声が100%正しいわけではありません。しかし、顧客の声に謙虚に耳を傾けることは、サービス機関がやらなければならないABCであります。

多摩大での調査は、消費者学生の声に耳を傾け、教師がそれぞれの講義の内容の向上と、教授法の改善と進歩に役立てることが目的であります。それゆえ、調査結果は各教師に直接伝えられるだけで、教授会での審議の対象になることもありません。ただし、個々の教師がその調査結果を持ち寄って、比較検討し、授業のあり方についての研究会を開くことは、まことに好ましいことだと考えます。

各 位

二通の手紙

野 田 一 夫

ヨーロッパから帰ると、いつものように、山積していた仕事の処理に追われて、貴重な時はあつという間に過ぎて行きます。出張中に届いていたたくさんの手紙を読み、ご返事を差上げるのもなかなかの負担ですが、今回は心に残る手紙が2通あったことは救いでした。

ひとつは、多摩大在学生の父親の方からの匿名の手紙で、多摩大の経営および教学上の事柄に関して「日々新たな前進がどんな風になされているのか」また、学生の学業成果に関し「本人がどんなレベルにあるか」、以上の2点を家庭に隨時報せて貰えないものかというご提案でした。何れもごもっともなご提案だと同感し、前者に関しては「多摩大新聞」を編集発行するとか、後者に関しては現在の「アドバイザー制度」を活用するとか、何れにせよ早速次回の教授会で具体案を検討しようと考えております。それにしても「……バイトにバイクにクルマと勉強の時間がどの位あるのか……」と息子さんことを案ずるお父上の気持が私の心に伝ってきて感激しました。

いまひとつの手紙の主は、某大学の1年生。多摩大の入試に失敗しながら、なお多摩大への執着を捨てきれず、室伏哲郎編『多摩大学』を読み、新聞・雑誌に掲載された多摩大の記事を追い、機会あれば編入試験に挑戦してでも多摩大に入りたい等々、綿々と書きつづられた文面にその心情があふれています。入学したいという熱意で入学を許すわけにはいきませんが、どうせ入学させるなら、そうした熱意のある学生をこそ選抜したいものです。妙にしらけきった輩、考え方のひねくれた輩、礼儀知らずの輩……日常こんな学生に接するにつけて、入試の成績が多少良かったからといって、何でこんな連中を合格させたのかという気になるのは、果して教育者失格の証してしょうか。

教え甲斐のある学生
各 位 野 田 一 夫

私が理事長職にある財日本総合研究所は、開設以来、ハーバード大学の卒業生が次々に研究員として働くにかけています。全て、私の30年来の親友エズラ・ヴォーゲル教授の弟子で、学生時代から日本に関心を持ち、日本語の基礎を学んでから来日したわけです。半年も働くと彼らの日本語は一様に見違えるように達者になるのですが、日本語の会話力のみか、読解力、文章表現力……といった総合点で文句なく16.1はマイク・ベレット君で、彼は目下多摩大で「ビジネス英語」を教えています。

その彼の最近の憂鬱は、学生の基礎学力の低さとヤル気のなさです。英語はいさうに及ばず、日本語の水準も驚く程低い上に、講義にほとんど出てこないという学生も多いからです。先日、「……出席を強制してもっときびしくしめ上げたら……」という彼の提案に対して、私は彼を慰め励ましたながらこう答えました。「……学生に出席を強制するのも学力水準の低い学生を進級ないし卒業させるのも、私の理念に反する。したがって、幸い何人かついて来る者がいたら、他の者のことは考えないで、かまわんから彼らにだけ教育の情熱を注いでくれ……」と。

多摩大は教育上学生のためになると思うことはできる限り実行するつもりです。しかし、それでもヤル氣のない学生のことを私共は余り案じたくありません。それは何よりも教員のヤル気を喪失させてしまうからです。1～2期生のうちから、たとえ50人でも60人でも、私共が多摩大学を設立した理想を体して卒業していく学生を教育できれば、多摩大が設立された社会的意義は十分あるのです。私共の努力が実り、多摩大の評価が高まるにつれて、年とともに教え甲斐のある学生は確実に増えづけ、やがて学生全員が多摩大の理想を体して卒業していく日が必ず来るることを、私は信じて疑いません。

品格と表現力

各 位

野 田 一 夫

先週出張先の広島のホテルで朝出発前、英國の新首相ジョン・メジャー氏およびシンガポールの新首相ゴー・チヨクトン氏の所信表明を視聴しました。どちらも甲乙なくさわやかな印象を与えてくれたのは、①顔つきや態度にじみでる品格、②47歳と49歳という年齢以上の若々しさ、③簡潔にして内容のある所信表現力のために、多少の偏見があるかも知れませんが、わが国の政治指導者に揃って欠落している人間的属性です。

ほぼ同じ時期にわが国でも財界の最高指導者の交代が報じられましたが、78歳が退任して75歳が新任されるということは、お二人の人格・識見とは別に納得できないというのが、国民大衆一般のいつわらざる気持ではないでしょうか。ことに品格や表現力は単なる年齢の積み重ねによって備わるものではない以上、指導者たるもの、この2つの属性だけは身につけておくことが、わが国の“国際化”への必須条件と思われてなりません。

メジャー氏はいわゆる“学歴のない”という点で、英國保守党の党首としては異例中の異例だといえます。しかし、いかにも有能でも、氏が遅くとも30歳までに今の品格と表現力を身につけていなかつたら、サッチャー前首相に目をつけられ、閣僚に抜擢されることはなかつたでしょう。その意味で、品格と表現力こそは、わが国以外の国々では、能力と同等あるいはそれ以上に重要な人間的属性であると信じます。

ご承知のごとく、多摩大では1~2年次の一般教育の課程で、書く・話すという日本語の表現力を必須科目とし、絵画、メロディー、演技による表現力の1つ以上を選択科目にしています。その効果の程は今のところわかりませんが、大学卒業までに学生の人間としての品性を高めるための方法とか対策には目下頭を痛めております。何かいいご提案はありますか？

THE ENIGMA

各 位

野 田 一 夫

目下話題の書、カレル・ウォルフレンのTHE ENIGMA OF JAPANESE POWER(邦訳、篠原勝訳『日本権力構造の謎』、早川書房)は、Japan perplexes the world.という簡潔な非難調で始まります。超大国でありながら一向にその責任を果そうとしない日本に対して諸外国が圧力をかけようとしても、この国独特の権力構造には責任の究極的所在がさっぱり不明で、そのことが世界を苛立たせ当惑させてしまう、というのです。

政治家、高級官僚、財界人といったアドミニストレーターのみならず、労組や学校や暴力団を含めすべての社会構成セクターまでを抱き込んだ壮大な power process が存在し機能している日本は、国家(state)と呼ぶより、“ザ・システム”と呼ぶにふさわしい……等々、本書を読み進んでいくと、日本の権力構造の魔訣不思議なクモの巣の中で悪戦苦闘をしている著者の知性が痛い程心に伝わってきて、すっかり考えさせられます。

ふと、これも今年話題の、渡辺淳一『うたかた』(講談社)の主人公たちを想い出しました。妻のある熟年の男(安芸)と夫のいる中年の女(抄子)との延々と果てることのない単なる情欲の物語りなのですが、折り折りの密会の立居振舞や背景となる自然の描写の美しさの故に、二人の関係が読者には“不倫”というより“純愛”とまで感じられるのです。「自然の移ろいとともに、二人がそれぞれの家に残してきた愛情も未練も憤怒も、また歳月とともに色褪せていく。……振り返れば、すべてうたかたのごとく儂い」という詠嘆調でこの作品は終ります。

結局、私的にも公的にも欧米的意味での“責任”倫理が稀薄なことが、日本の社会の特色といえます。日本人一般にこの倫理を期待することは無理ですが、少くとも大学生ぐらいにはこの事実をはっきりと理解させておく必要はあると信じます。

春の時代を迎える大学

各 位

野 田 一 夫

今や文部当局や大学経営者の間では「日本の大学が“冬の時代”を迎えようとしている」という認識が常識化しています。この認識の最大の根拠は、平成 3 ~ 4 年をピークに 18 歳人口が減少に転じ、現在 200 万人の人口が 21 世紀初頭には 150 万人を切るであろうという予測にあります。

しかし私は、かりにこのデモグラフィックを予測が的中したとしても、だから日本の大学の経済環境が全般に非常に厳しくなるとは、とても信じられません。この間に大学の経営にとっての好条件も進行してくるからです。その典型的なものが、80 年代以降社会人の間に高まりつつある知的好奇心です。

朝日カルチャーセンターに象徴されるように、老若男女を問わず社会人を対象として教育産業は花盛りですし、文部省も高齢化社会に対応して“生涯教育”を重要な政策課題としています。社会人が教育欲求を充すためには時間と経済の余裕が必要ですが、明治開国以来百有余年にして、わが国では庶民レベルでやっとその条件が充たされてきたのです。社会人とそれからの大学にとって新しいそして無限に拡大する市場です。

次は外国人です。逞ましい経済力と不可思議な文化的魅力によって、外国人の日本への関心は高まるばかりです。この関心に対して日本の大学は果して積極的な対応をしているでしょうか。少くとも欧米の大学、ことに米国の大学では、外国人に対して一般に門戸は広く開放されているのに、日本の大学の現行の制度や慣習は、逆に外国人を排除しがちです。

「大学は高校卒業直後の若者を教育するところ」という在来の考え方を改め、時代の要求に沿って教授陣、教育の内容と方法、建物・設備等の刷新・拡充に成功しさえすれば、日本の大学は、これからやっと“春の時代”を迎えることができるのです。

多摩大学の光と影

各 位

野 田 一 夫

光がさせば影ができます。光が強い程影も濃くなります。それは単に物理的現象だけでなく社会的現象についてもいえることです。たとえば、現在の多摩大学の場合です。

今年、多摩大学は世間の脚光を浴びました。開学の方針に基づいて実施に移した制度や方式に対してマスコミが予想以上の関心を示し、いろいろな形でくり返し報道してくれたからです。別に本学の方から売り込んだわけではありませんから、本学が浴びた脚光は多分に好運に恵まれたからといえます。

まず何が好運であったかというと、大学の伝統的“権威”が揺らぎ始めていたことです。大した教育の成果があがっていないのに大学自身が一向に改めようとしない世間離れした制度や慣習に対して、人々が疑念をつのらせつつあったのです。『文学部唯野教授』は正にそういう大学ないし大学教授を扱ったパロディーだからこそ爆発的人気を得たといえます。

マスコミが好んでとりあげ喧伝してくれた本学の“退学勧告”にしても、“休講なし”“講義定刻”“年間講義案”……にしても、すべて世間の常識からすれば当たり前のことばかり。この当たり前のことを真面目に実施しようとしている、というだけで世間は喝采を博し、エールを贈ってくれました。しかし、銘記せねばならぬのは、私共が実施に移した当たり前の制度や方式の成果を、世間が評価したわけではないことです。

多摩大学の教育は期待された成果を十分挙げている段階とはいえません。最近つとめて教員の方々や学生諸君に接した印象では、本学のイメージにそぐわない学生も未だかなりおり、一部の学生はイメージに重荷さえ感じているようです。光が当ったからこそはっきりしてきたこの“影の部分”，これこそ、来年度私共が克服すべき最重要課題と信じます。よいお年を……

各 位

今年の主役は学生だ！

野 田 一 夫

新年おめでとうございます。誰もが元旦には新年の目標を心に抱くのですが、私のそれは標記の「今年の主役は学生だ！」という言葉に集約されます。*TIMIS-82*でも記したごとく、昨年春私は「学長の仕事は広報だ！」と割り切り、新設多摩大学の知名度を高め、また良きイメージを形成するためにあらゆる時間を割きました。幸いこの広報努力は予想以上に実り、今や多摩大学は「小さい新設校ながら大きな理想を掲げ、個性的教育を推進している……」というイメージを確立するとともに、知名度も信じられない程高まつたといえます。

しかし、大学の真の評価は、その大学がどんな人材を世に送り出したかによって定まるものです。いよいよ今年4月から専門課程の教育が始まり、就職対策にも本腰が入ります。2年後就職先の方々から「さすがは多摩大学の卒業生だ」と評価されてこそ、私共がつくりあげたイメージは実のあるものとなり、そして永続的に輝きを放ちつづけるわけです。したがって、新年を期して私共は、過去2年間の本学の教育を総点検しつつ、教職員一体となって所期の教育成果の達成に全力を尽くすつもりです。その成否は学生を主役になしうるか否かです。

たとえば昨年末、望月照彦教授の基礎ゼミの発表会がありました。その席に来賓として招かれていたある企業経営者は、交互に主役をつとめた学生たちのプレゼンテーションの内容と技術に目を見張り、同席していた中村学部長に「……とても1,2年生とは思えない……」と洩らされたそうです。まことに力強い話です。現代の若者には私共の世代でははかり知れない才能とポテンシャルがあります。彼らが多摩大学に学ぶことによって知に目ざめ、個性を自覚し、自信に充ちて人生を歩みだすこと、それを実現することに本学の存在理由があるのです。

大学設置基準の大綱化 各 位

中 村 秀 一 郎

大学のあり方についての文部省の考え方は大きく変りつつあるようです。大学審議会大学教育部会および高等教育計画部会における審議の概要(平成2年7月30日, 10月31日)には、それが端的に示されています。ここでは、これまで大学のカリキュラムの枠組を細かく規定してきた大学設置基準を大幅に簡素化し、それを大綱化することを主張している点が注目されます。

これは革命的な提言といって良いでしょう。なぜなら、もはや学生の卒業要件としては修得すべき単位数が規定されているだけだからです。つまり、大学の各学部はその教育目的達成のために必要な授業科目を自由に開設しうることになり、これまでのような一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、専門教育科目の区分によって、それぞれの開設を義務づけられることはなくなります。はじめて各学部が個性的な特徴あるカリキュラムを本格的に展開することが可能となつたのです。

「大綱化」は、大学設置認可のあり方をも大きく変えることとなります。大学の評価については大学自身による自己点検・評価が基本となり、それを効果的に実施するために、アメリカのアcreditation・システムのような、大学団体などが、各大学の自己評価の検証を行って、その客観性を裏付けることが期待されているのです。いってみれば、これまでの国の大学管理が、大学の自主管理に委ねられることになるのです。

この大学行政の大転換は、多摩大のように、一般教育科目等と専門科目の境界線を低め、担当者の相互乗入を進めて、独創性あるカリキュラムを追求している大学にとっては歓迎すべき事態です。その反面、設置基準のカリキュラムの枠組が既得権化し固定化してしまっている既成の多くの大学にとっては、実現困難な問題を投げかけたことになるでしょう。

理想は遠のいてないか

各 位

野 田 一 夫

「……立派で有名な教授陣を揃え、その情熱もすごいもので、私たち学生にとってこんなありがたいことはなかった。ところが、この教授陣に思わぬ落し穴があったのです。有名で立派をゆえに外での仕事の方が忙しいらしく、大学での講義がなおざりになっているのでは、と感じられる先生が目に付くようになつたと思う。……」「……“多摩大学は他の大学とは違う”と言われているが、実際にどこが違うのか。……他校の学生が私たちをうらやましがっていることを知りました。それを聞き、はづかしく思います。……何かが間違っています。（本学は）間違った道を進もうとしています。今、この道を正しく直す必要があると思います。……」

何れも本学の学生の本学への率直な所感です。正月休みに、一冊のリポートとして届けられた何人かの学生諸君のこうした声に、私はじっくり耳を傾けました。読み進む過程で私の心中に僚友中村学部長の名言—「多摩大学の敵は多摩大学である」が何回も蘇り、読み終えた時は一種厳肅な気持にさえなりました。いよいよこの4月から専門課程の教育が始まりますが、その前に私どもは本学の教育体制を総点検し、もう一度清新な雰囲気をキャンパスの中に蘇らす必要が絶対にあります。

「多摩大学の現実がその理想から遠のきつつあるのではないか」ということを最初に私に直言してくれたのは、松尾欣治氏（学生教育研究所主幹）でした。ある雑誌に本学の記事を寄稿する目的で本学を視察し、学生の何人かをインタビューした後の、氏のいつわらざる感想でした。なぜかピンときた私は、早速本学教職員諸兄に順次アピールし、また松尾氏自身にも協力を仰いで、学生の活力を振興する策をいまこうじ始めました。私共は何としても、建学の理想を実現しようではありませんか。

41歳寿命説

各 位

野 田 一 夫

最近読んだ本の中で、面白さ（感銘度とは別に）の点で、西丸震哉氏の「41歳寿命説」の右に出るものはありません。本書では「昭和34年以降に生まれた日本人は、平均寿命41歳という短命になる」という説を、とうとうと述べています。

少くとも経済的には、わが国は目下未曾有の繁栄を謳歌しています。そして、この間日本人の平均寿命が男女とも世界一となつたことは、繁栄の何よりの象徴的事実といえましょう。だが西丸氏は、この事実の裏にあるトリックを指摘するとともに、一步進んで、繁栄日本に対し深刻な未来を予告するのです。

なぜ昭和34年が転換点なのか？　なぜ41歳なのか？　なぜかくも急速に短命化するのか？……氏の説に対しては、当然のことながら専門家の中から多くの疑問や反論が投げかけられています。いやむしろ、荒唐無稽の説と一緒に付す人々の方が多いのかも知れません。しかし、わが国の一般大衆が、氏の説から大きな衝撃を受けるのはなぜでしょう。

どうやら現在の日本人の中には、わが国の大絶大な経済力にふさわしい高遠な理想や逞しい抱負に胸をふくらませる人々はほとんどいません。むしろ、彼らの大部分の心は、この繁栄に突然の終幕を告げる破局の到来をひそかに感じとり、その影におびえているようです。

「10年後には（大学を出て7，8年、やっと社会人として一人前になった年代層の人々の）半数がもはや存在せず、生存者もかなり体力を落としているという惨状を呈する。そんな連中でこれから社会を責任をもって担ってはいけない。だから大学に行く必要はなく、大学出は役立たずになる。……そこで社会は大卒者をもう間にあわないグループとして拒絶する筈である」……実に明解な“大学冬の時代”論ではありませんか。

各 位

そん な 少 年 よ

野 田 一 夫

先日大学で、学生の一人と熱い議論をたたかわしました。話題は“ゼネレーション・ギャップ”。相手はなかなか頭のキレる学生で、「私達の世代の気持なんか、年をとった人達にはどうせ100パーセントは理解できっこない」と言い張るのです。それに対して私は「そんなこと当り前。国、性別、職業……何が違ったって、人と人とのコミュニケーションは昔からむつかしい。しかし、人間お互いの気持が通じれば、理解度は無限に深まっていく。なぜ100パーセントにこだわるの?」と反論。

この議論の余韻さめやらぬ数日後、ある雑誌の読者欄を開くと、徳岡孝夫氏の檄文「若者よ、中東で死ね!」に対する23歳の学生の投書が目につきました。「…あなた方中年オジさんこそ中東で死んだらどうだい。一生働いたところで家は持てない。(…残業して)酔い潰れて最終電車で帰れば女房子供に冷たくあしらわれる。滅私奉公してきた会社からは辞令一つで左遷され、行きつく先は突然死。生き永らえても老後の面倒見る者なし。それよりも……」と、まことに心寒い“悪口雜言”。

ひどい国になつたものだと教授用ラウンジで嘆いていた私に、同僚の門馬晋さんが、井上靖の「そんな少年よ」をコピーにしてそっと手渡してくれました。「…私は何回もポストを覗きに行つた。私宛ての賀状は3枚だけだった。3枚とは少なすぎると思った。自分のことを思い出してくれた人はこの世に3人しかなかつたのであろうか。正月の日の明るい陽光の中で、私は妙に怠惰であり、空虚であった。私は15歳だった。あの日の私のように、人生の最初の一歩を踏み出そうとして、小さく不安にたじろいでいる少年はいまもいるだろうか。いるに違いない。そんな少年よ、おめでとう。…」の文章に胸うたれました。

有難う、門馬さん! 私と議論した学生に、近くヘミングウェイの『老人と海』を贈るつもりです。

内は福、外は鬼？

各 位

野 田 一 夫

今年の節分も終りました。節分といえば豆まき、豆まきといえば「福は内、鬼は外」です。「鬼が自分の内(家)に入つてこないよう外に追っぱらいさえすればよい」という考え方には、「いかにも日本的である」という批判もあります。一応もっともな意見ですが、よく考えてみると、何とも筋が通りません。いったい、「福は外、鬼は内」という自己犠牲的ないし自虐的考え方のまかり通る国はあるのかというと、ある筈はないからです。

一昨日、昨日と多摩大学は本年度の入学試験を行いました。臨時定員増で収容定員は昨年に比し倍増したのに志願者もふえて、今年も名目倍率は25.2倍という“狭き門”です。当然のことながら、本学の基準に照らして好もしい若者を合格させ(福は内)，残りを不合格にする(鬼は外)わけですが、このやり方は古今東西を通じて、あらゆる機関が押しよせる志願者を選考するための普遍的原則ではないのでしょうか。

では何が日本的かといえば、それは「内は福、外は鬼」と表現すべきでしょう。すなわち、わが国では、同じ集団なり組織に属する成員の間には没個人的一体感がみなぎり、外部の人々に対しては考えられないほどの排他性がはたらくのです。大学についていようと、入試はひどく厳しくても、一度入学した学生は、どんなに学力が伴なわなくても卒業させてやろうとします。教員でも、仲間の怠慢には寛容である反面、外部の有能な人材を迎えることには本能的抵抗を示す傾向があります。会社でも役所でも日本人の集団には、とかくこうした湿潤な仲間意識がつきものです。それは健康な人間関係をむしばみ、逞しい連帯感の形成を阻み、遂には理想とか正義といった根源的なものまでを風化させていきます。多摩大学は、日本人の組織としても21世紀型ニューモデルを開発し定着させたいものです。

哀れなるかな“生涯現役” 各 位

野 田 一 夫

わが国内では目下、2つの引退話が世間の注目を集めています。申すまでもなく、鈴木都知事と堤セゾングループ代表の引退に関してです。80歳の鈴木氏は“生涯現役”という信念をもって先日立候補を宣言。一方63歳の堤氏の引退表明には、その背景と真意をめぐって、さまざまな憶測が飛びかっています。

80歳の人が引退を表明し、63歳の人が引退勧告を蹴ったというのなら、引退話としてはごく自然ですが、それが逆であるという点で、この話題は私を考え込ませます。社会的影響力の大きいポストであればある程、それを占めている人が何歳で引退するかは、当人の意思と周囲の情勢に依るほかはないであります。しかし個別論ではなく一般論として考えた場合、“生涯現役”論ほど危険なものはありません。

なぜなら、①肉体面にはもちろん（目には見えにくい）精神面においても、人が70歳代、80歳代と老いていくのは自然であり、②強いリーダーの在位が長びければ、必らずといっていい程その周辺には権力体制ががっちりとつくられる結果、組織自体が環境への柔軟な対応力を失い、③優れた後継者を含め後進育成の途は全体として阻まれてしまうからです。

したがって私は、どんな理由にせよ堤氏が引退を表明したことに対する賛意を表し、逆に、鈴木氏が立候補されることに疑念を感じます。鈴木氏の精神は果して肉体以上に若く保たれているのか？ 鈴木氏を支持する勢力は鈴木氏自身より現在の体制を頑固に守りたいのではないか？ 鈴木氏にはどんな後継者構想があるのか？ これが一都民としての私の疑念です。

因みに、私自身が“生涯現役”などと言い出した時、私の精神は間違いなく老化してしまったとご判断下さい。本学学長に任期制を定めた最大の理由です。

“良い・悪い”から“好き・嫌い”へ

各 位

野 田 一 夫

入試が終ると入学式、入学式が終ると来年度の学生募集の準備、まずは「学校案内書」の制作。昨年は出遅れて苦労しましたが、今年は素晴らしいものができそうです。先日R社の若いスタッフのプレゼンテーションがありましたが、その発想とセンスの斬新さにすっかり感心し、そんな自信が生まれました。

「第2次大戦後、大学は数%の特権階級から解放され、誰もが平等に利用できるようになった。ところがその後半世紀、大学は人々の期待外の方向に進むことになる」という認識に立って過去40余年を“大学先史暗黒時代”と呼び、多摩大学こそ時代を突き破るパイオニアだという提案です。これだけでは何となくすぐったい気がしますが、実はこの先が傑作なのです。しかし、学外秘でここでご説明できないのが残念です。

このプレゼンテーションを聞いていて、最近谷口正和氏から贈られた『10代スキキライ白書』のことを想い出しました。今や日本人の消費の判断基準は「良い・悪い」から「好き・嫌い」へ変ったといわれますが、本書は時代を最も敏感に感じる十代の少年少女156人を渋谷の街頭でインタビューし、その所見から21世紀の経済社会を洞察しようという異色の本です。

「本木雅弘、真木蔵人……」「プリンセス・プリンセス、ユニコーン……」「Fine, Mcスター……」、ご存知ですか？彼らが好きな芸能人、音楽バンド、雑誌の順位です。逆に「東大、国士館……」「三越、東急……」「新宿、竹下口（原宿）……」が嫌いな大学、百貨店、街の順位です。古ぼけた権威、洗練されない華やかさ、幼稚っぽい媚び等々は見事に否定されています。多摩大学は単に“良い”大学を目指すだけでなく、若者にたまらなく“好かれる”大学になる必要があると、つくづく感じさせられました。

各 位

大学設置制限への疑問

中 村 秀 一 郎

大学審議会による大学設置基準の大綱化がもつ革新性についてはすでに広く評価されていますが、それに関連して高等教育計画部会審議概要にも示されている「首都圏及び近畿圏における工業（場）等制限地域については、現行計画に引き続き、大学・短期大学の新增設は原則として行わない」という大学の地域配置の考え方は、とくに再検討を要望したいところです。

もともと大学が「工場規制三法」によって規制されるというのは、まことに奇妙なことといわざるをえません。こうなったのは、最先進地域では過密と環境破壊を喰いとめるという目標達成のために、大学は過密を促進するものと位置づけられてしまつたからです。しかし工場を問題とする発想でさえ、FAの時代、公害防止先進国日本では、すでに過去のものとなり、むしろ大都市における工業をふくむ産業のバランスこそその活性化のキメ手とみなされる（東京都「地域産業振興ビジョン」）に至っています。

まして情報化のるづぼとでもいべきこの地域こそは大学にもっともふさわしい学問的環境であることはいうまでもありません。もし国土のバランスのとれた発展のために、それが有害というのでしたら、首都・近畿圏大学と地方大学とのネットワーク形成を進めたらどうでしょう。これによって教師も学生も巨大都市と地方の双方の良さを享受できることとなるからです。

この1月、国土・運輸・建設・通産の四省庁連合による東京湾南西地域総合再生計画調査委員会が発足し、2010年を目標にこの地域の再生計画の作成が開始されました。筆者は通産側の委員長をお引受けしていますが、このなかで、情報化先進地域における研究機関と高等教育機関のあり方について、積極的な見解を表明したいと考えています。

アッシー・メッシーの時代 各 位

野 田 一 夫

いよいよ近く多摩大学の新聞 THE TIMIS が発刊されます。学生の有志が編集の責任を負い学校側が物心両面で衷心協力するという形で、作業が進められています。編集部員 5 人は、編集者の公募が行われた際率先申し出てくれた学生で、1 年生の男子ばかり。いざ仕事が始まると、取材その他でどうしても女性の協力が必要であることがわかつたため、5 人の男子編集部員が手分けして適當な女子学生をくどき落そうということになりましたが、結果は失敗に終ったようです。

戦前派の私なんか、その話を聞くと何とも情ない気持になります。仕事にもっと情熱と理想と自信があったなら、どんな女性の協力だって得られない筈はないと思ってしまうからです。しかし、余りそう思い込むことも間違いのもとかも知れません。時代は大きく変わったからです。先日某テレビ局の有名美人キャスターが離婚するに際し、何と原稿用紙 400 字にして 550 枚に及ぶ 14 通の手紙を彼女に綿々と書き送った夫は「彼女からは一通の返事ももらえなかつた」と涙を流して嘆いたとのこと。何と女らしい男でしょうか。それに反し、この件に関し一切弁明しなかつた彼女の立派さ！

先日大学生のわが娘が「私のことではない」とわざわざことわって教えてくれた現代女子学生のボーイフレンドの類型は、「キープ君」（本命の人が見つかるまでの束の間の人）、「ミック君」（欲しいものをねだる相手）、「アッシー君」（車の必要な時の友達）、「メッセー君」（食事をおごらせるための友達）……。これでは男子学生も浮ばれません。希わくは、この軽薄にして不遜な女子学生どもに神が天罰を下されんことを、と祈りつつ、ひたすらに天使のような女子編集部員の出現を待ち望む日々です。

パラダイム変換

各 位

野 田 一 夫

トマス・クーンが好んで使った“パラダイム”という用語は今や時代の流行語のひとつです。ほとんどどんな分野でもこの用語が使われる反面、余りに使われるためその概念内容はますます曖昧になっていくばかりです。現実は早いテンポで多様に変化していくのに、現実を理解するための思考の基本様式や枠組みはそれに応じて変化しませんから、いつしか、既成のパラダイムが新しい現実の理解を妨げたり、偏見や固定観念を生みだしたりしているのみか、好ましい現実を形成するための表現とか発想そのものを圧迫しさえします。

本学の井上一郎（ペンネーム、那野比古）教授から数週間前に惠贈された近刊「東大先端研」（NTT書房）を、この週末やっと通読しましたが、本書は、大学研究機関における典型的パラダイム変換の試みとその成功過程に関する誠に説得力のあるリポートです。1987年4月に発足したばかりの東京大学先端科学技術研究センターは、東大の付置機関でありながら、東大の各学部や研究所とは全く違った制度と運営方式を導入しています。センター長をはじめ各教授連が“学際性”，“流動性”，“国際性”，“公開性”という4つのモットーに共鳴して、本郷や駒場から進んでここへ移ってきたからです。

積極的な产学協同の推進、時限任期制とか学外（他大学、産業界等）からの客員教授制の導入、自然科学と社会科学の境界の打破、日本一ではなく世界一を目指す研究……は全てこうした方針の産物です。本学も国際性・学際性・実際性という3つの教育方針をかけ、在来の日本の大学とは全く違ったパラダイムのもとで発足しましたが、東大先端研に典型的にみられるような、私共よりもっと先を行く教育・研究機関の試みを常に注目しつつ我が身を反省しつづけていきたいものです。

コミュニティ・カレッジ'91

各 位

野 田 一 夫

「市民への大学の開放」と「社会人を対象とした各種活動の展開」という本学の基本方針に沿って昨年秋から手さぐり的に“多摩大学コミュニティ・カレッジ”（略称：T C C）が開講されましたが、幸いその結果は好評でした。これに力を得て本学では、今年は昨年より一步進んだ形でT C Cを開催致します。

今年度のT C Cの柱は(1)通常講義の公開、(2)特別講座＆ミニコンサート、(3)コンピュータ講座です。(2)と(3)は内容的に昨年のT C Cの延長で、(2)は5月下旬から11月中旬にかけて土曜日午後、井上宗迪、山口令子、木村尚三郎、青井紀子、門馬晋、日下公人氏を講師とする全6回の講座、(3)は尾高敏樹、今泉忠、川端敏郎3講師による①日本語ワープロソフト（一太郎Ver3）を利用した入門講座、②Ms-Worksを利用したコンピュータソフト活用講座、③プログラミング講座（PASCALを用いて）の3コース、何れも9月から12月にかけて各24時間の講座です。

今年度からのはじめての試みは(1)で、井上一郎教授「自然科学概論」（月曜14:40～16:10）、井上宗迪教授「日米企業経営論」（月曜14:40～16:10）、井上一郎教授「コンピュータ概論」（火曜9:00～10:30）、山本満講師「国際関係論」（火曜10:40～12:10）、日下公人教授「日米企業論」（水曜10:40～12:10）、星野克美教授「消費経済論」（水曜10:40～12:10）、志賀信夫講師「コミュニケーション論」（水曜14:40～16:10）、金子満講師「映画演劇論」（木曜9:00～10:30）、白根禮吉教授「情報概論」（木曜14:40～16:10.）といった豪華版です。

受講者全員には本学図書館を自由に利用して頂ける等の配慮も致しますから、ご関心を抱かれる方は、多摩大学 T C C 係（〒206 多摩市聖ヶ丘4-1-1）宛に資料をご請求下さい。なお、問い合わせのお電話は 0423-(37)-7111です。

各 位 ボイス(学生の声)調査の所見

中 村 秀 一 郎

学生の声に耳を傾け、教師がそれぞれの講義内容の向上と教授法の改善・進歩に役立てることを目的とした多摩大ボイス(学生の声)委員会は、調査(昨年12月10日～14日実施)結果を2月16日に公表しました。個人別の集計は、私から直接に各教師にお渡ししております。早くも今週のAERA(4月2日号、朝日新聞)はこの調査を大きくとりあげています。

全体集計(配布枚数2,351枚、有効回収率67.5%)によって、多摩大の学生による教師の教育効果評価(7段階)を見ると、中間点4点を超えるもの83.6%、最高点(6～7)38.5%に達し、「説明が明解」「全体としてまとまりがある」等9項目による授業内容評価(5段階)も平均値(3点)をこえる3.51となっており、講義は一応の評価を得ているものと思われます。

調査表には、学生諸君の授業に対する意見や感想も多く書かれています。そのためもあって、各自の調査結果の公表を入会条件とする教師有志による「授業マネジメント研究会」も発足しました。3月16日その第一回会合を傍聴していますと、学生の意見をめぐって「やはり聞いてよかったです」「それは気付かなかつた」「ここをこう変えてみよう」といった卒直な意見が交わされているのが印象的でした。

学生側の全く見当違いな意見もありますが、教師の気持をおしあなた改善策の提案が圧倒的です。調査委のリーダー、大槻博教授の話では、私共のこの試みについて大学人からの批判があり、ただしそれらの多くは、「学生は駆けの対象」「その意見をありがたく拝聴しようとする姿勢は疑問」「学生は教師の評価能力なし」といった見解のようです。本学では、これらとは逆に、まず粉飾されない学生の声に耳を傾けるのを教育の原点と考えているのですが……。

“大量留年”に想う
各 位

野 田 一 夫

今年も4月に入りました。3月末といえば“卒業式”，4月初めといえば“入学式”というのが、わが国の慣習です。この季節に今年マスコミを通して広く話題となつたのが、明治大学法学部の大量留年です。ご存知のごとく、同学部の卒業予定者1,424人中実に148人が必修課目である新美教授の「債権法」一科目を落としたために、卒業できなくなつたという事件です。

しかしそく考えてみると、これは果して事件といえるのでしょうか。卒業資格のない学生が留年させられるのは、言わば当たり前の話。そういうえばその数日前、必修単位の足りない学生に対して規則を曲げて卒業させた駿河台大学の“温情措置”は、マスコミに報道はされたものの、大して話題にはなりませんでした。新聞学でよく使われる「犬が人に噛みついてもニュースにならないが、人が犬に噛みつくとニュースになる」というたとえがありますが、大学の世界はどうやら逆のようです。

先週は新聞社や雑誌社からやたらに電話がかかってきました。みな決ったように「今回の明大の措置をどう思われますか？」という切り出し方でした。最初のうちは「ところで何故、私のところへ？」と聞き返したのですが、答は必らず「あの事実をキャッチした途端に、多摩大学のことを想い出したので……」というわけです。本学の“退学勧告”が短期間のうちにいかに世間に浸透したかが裏づけられた感じでした。

ところで、昨年私が“退学勧告”をした12名の学生のうち退学者は2名で、残り10名のうち3年へ進級できなかつた学生は6名、何と4名は2年次で頑張ったおかげで見事進級、そのうち1名は全教員が驚くほどの成績をあげてくれました。誰よりもそれを嬉しく思う私は、今年の“退学勧告”者10名の健闘をいま切に祈っています。必らず彼らは頑張るでしょう。

第3回入学式

各 位

野 田 一 夫

4月9日午前10時30分より、本学の第3回入学式が「パルテノン多摩」で挙行されました。今年のゲストは多摩市長の白井千秋氏とハーバード大学教授のエズラ・ヴォーゲル氏。

白井氏は、開学わずか2年にして多摩大学が確立した社会的評価を絶賛され、多摩市は多摩大学をよきライバルとして今後も素晴らしい街づくりをしていきたい、と新入生をあたたかく励まして下さいました。一方、ヴォーゲル教授は、“ボーダーレス時代”に日本の青年に期待される役割を強調され、例のクラーク博士の名言をもじって、“Boys and girls, be ambitious for the world!”という軽妙な言葉で話を終えられました。ともに出席者全員には忘れない名スピーチでした。

すでにご承知のごとく、今年は文部省の臨時定員増のワクの大幅緩和措置により、過去2年異常に高い入試倍率のつづいた本学の収容定員は、一挙に倍の320名にはね上りましたが、入学志願者数は昨年より34%も増加した結果、名目倍率は20倍を軽く超えてしまいました。つまり、今年の本学の入試は依然として難関であった上に、昨年来一気に高まった本学の知名度のおかげで、志願者の質は昨年度のそれより一段と上ったと思われ、新入生にも大いに期待がもてそうです。

ただし、多摩大学の現状に対して私は安心も満足も致しておりません。率直に言って何から何まで、多摩大学はまだ未完成の段階です。マスコミが喧伝してくれたことは、本学が日本その他大学に率先して実行した方策や措置であって、それらの実績ではありません。また本学の理想に対して、現実はまだ程遠いといわざるをえません。本学の教職員一人一人は気負いもせずまた気落ちすることもなく、今年も所期の理想に向ってマイ・ウェイを黙々と歩みつづけるのみです。

怒鳴り合い

各 位

野 田 一 夫

先週土曜日は、各学年オリエンテーションのあと、昼食時にスポーツアリーナで「新入生歓迎」の全学パーティーを開催しましたが、予想以上の盛り上りでした。やはり学生の数が増えたことが、本学の活気を一段と高めてくれたようです。その盛り上った雰囲気の中で、私にとっては、その日学長になって始めて学生の1人と怒鳴りあったことが、忘れられません。

ことの起りは、私にあり大いに反省しています。本学学生の劇団「ザザンクロス」の諸君が大教室で新入生のために自作の舞台劇「欲望の果て」を演じてくれたのですが、最近の学生はしらけていて、折角の芝居をなかなか観に入ろうとしてくれません。私は「ザザンクロス」の諸君が春休み中も学校へ出てきて、何日も何日も懸命に稽古を積んでいるのを知っていましたから気が気でなく、そこここに屯している学生に声をかけて廻っていたのですが、たまたま声をかけたあるグループの学生のリーダーの態度が不愉快だったので、怒鳴ったのです。

いや嬉しいことに、他の仲間への見得もあったのか、あるいは余程腹にすえかねたのか、彼は階段をかなり降りかけていた私に、後から言葉を返してきたのです。私も振向きざま大声に早口で「……貴様なんか豆腐のカドに頭でもぶつづけて……」などと怒鳴り、その大声が廊下中にひびきわたって、あたりにいた学生は呆気にとられたようでした。

「学長に大声で口答えするなんて……」と憤慨される前に、「学長ともあろう者が……」とお嘲い下さい。しかし私自身の気分は実にスッキリしました。礼儀はともかく、気に食わなかつたら学長にでも食ってかかるだけの気概は、今の学生には貴重なものです。そして、気概のある学生に礼儀を教えることは、礼儀正しい学生に気概を持たせるより遙かに容易と信じます。

2冊の本

各 位

野 田 一 夫

いま全国的主要書店の店頭には、多摩大学に関する本が2冊並べられています。ひとつは中村秀一郎氏の『わが大学改革への挑戦』（東洋経済新報社），もうひとつは拙著『大学を創る—多摩大学の1000日』（紀伊国屋書店）です。ちょうど1年前には、室伏哲郎編『多摩大学』（二期出版）が出版され、その直後に例の“退学勧告”が朝日新聞に大々的に報じられたため、両者が火つけ役となって、新設の多摩大学が「小さいながら大きな理想を追求する個性的大学」として一挙に世間の注目を集め始めたのです。

中村氏はご存じのごとく「中小・中堅企業論」の国際的権威ですが、日本の学者には珍らしく産業界の実情に精通し、実際に数多くの経営者と親交を重ねておられます。過去数十年、とくに氏が終始強い関心をもちつづけてこられたのはベンチャー、つまり革新的新規事業です。これらの事業は、成功すれば経済社会への影響も多大ですが、反面事業をスタートアップするための苦労も並大抵ではなく、また失敗の可能性も高いのです。いつか氏は「多摩大学をつくってみて、はじめてベンチャーを真から体験でき、その道の経営者にもやっと顔が立つようになった」と私に述懐されました。本書のページを追っていくと、多摩大学を開学するまで氏が傾けられた知恵と努力と誠実さの重みが、私には改めて心に伝って来ます。実にこの人を得て、多摩大学は今日あるのです。ご一読を心からお奨め致します。

拙著は私が開学以前より3年余り、多摩大学の関係者ならびに支援者の方々に毎週送りつけたハガキ通信（Rapport およびTIMIS）の集成本です。熱心な愛読者の一人吉枝喜久保氏（紀伊国屋書店副社長）のご好意により、この度同社より立派な一冊の本として世に出ました。誠に光栄の至りです。

阪神タイガース

各 位

野 田 一 夫

人生はすべてうまくいったと自分で思うようにしている私ですが、どうしてもそう思えないのは阪神タイガースの熱狂的ファンになってしまったことです。別に関西とは縁もないのに、もう50年以上も前から一年の半分はこのチームのことについて喜んで過ごしてきました。そもそもそのキッカケは、叔父の一人が小学生だった私を、生れて初めてプロ野球（当時は職業野球）の試合を観につれて行ったことがあります。その時たまたま試合をしていたタイガースの選手たちが、子供心にも何とも豪快でたのもしい男達に感じとれたのです。あとから知ったのですが、その頃のタイガースは、呉、土井垣、景浦、藤村……といった史上最強のダイナマイト打線を誇っていたのです。

ご存知のごとく、最近のタイガースは“ダメ虎”などと酷評されるように、打たれ打てずの情ない試合が目立ち、セ・リーグのお荷物になり果てています。私だって何百回となく「こんなチームになんか2度と…」と頭では見離したのですが、結局情を捨てきれず、今年も不當に心を傷つけられ、不快感を味わう日が続いています。そういうえば、辞引で「はんしん」を引くと、タイガースは出てこない反面、“半身不隨”とか“半信半疑”などという縁起の悪い語句ばかり出てくるのも納得できます。

要するに、最近のタイガースの選手にはチームにも自分にも自信がもてないため、ここぞという時に固くなってしまって力を発揮できないのです。ちょうど、自他ともに二流とか三流と認めざるを得ない大学の学生と一流と認められた大学の学生とが対決する時のようなものです。幸い新設の多摩大の社会的評価は未定ですが、入学した学生達は、どれ程の自負を持っているでしょうか。どうも、1期生の方が3期生に比して、こうした自負の念が乏しいのが気になります。

飽食と飢餓

各 位

野 田 一 夫

“ゴールデン・ウィーク”も終りました。われわれ日本人の誰もがそれに長い休日を思う存分に楽しんだことでしょうが、この期間中、クルド難民やバングラデシュ被災者の悲惨なニュースが伝えられ、何となく後ろめたい気持ちに襲われたのは、私だけではなかった筈です。世紀末を生きる人間のこの対照的な状況は、21世紀の不安を現実を予知してくれているようです。

それについても、現在の日本の経済力とそれを基礎とする“豊かな生活”はいったいどこまで高まりつづけるのでしょうか。先日オーストラリア滞在中、メルボルン郊外の広大な会員制リゾートのオーナーにお招きを受け、2日間滞在してつぶさに現地を視察しましたが、彼は近く、日本人のパートナーとともに豪華なホテルを建設しはじめるところです。ゴルフ、テニス、乗馬、トローリング、スキーパ・ダイビング……何でもやり放題のこのリゾートでは、先頃日本人会員を募集したところ、湾岸戦争直後の時期であったにもかかわらず、数百人の会員枠は2週間のうちに簡単にうまってしまったそうです。

ゴールデン・ウィークが明ける前の晩、横浜一の会員制俱乐部「エクセレント コースト」で開催されたディナー・パーティは豪華の極みでした。何しろ日本の生んだ天才シェフと呼名の高い三國清三と現在フランスで指折りのソムリエJ.C. ジャンボンとが知恵をしづりウデに絆りをかけて素晴らしいディナーを案出してくれたのです。当夜出席した紳士淑女の何人が真にこのディナーを堪能されたのかわかりませんが、私はワインを料理ごとにあれ程覚えるものなのかを知って驚いた次第です。今やさほど広くはなくなった地球の上で、7億の飽食する人々と43億の飢えにおびえる人々の共存がいつまでつづくものでしょうか。来週の教室では、学生とこの問題を論ずるつもりです。

各 位

燃えつきて

野 田 一 夫

15日朝、新聞で千代の富士の引退に関する記事を読んでいる時、テレビで安倍晋太郎氏の計報に接しました。私が一番好きな力士、私が最も好感をもっていた政治家だっただけに、このお二人を惜しむ私の気持は一入です。

それにしても、安倍氏は昨年来入退院をくり返し、はた目にも痛々しい程の衰えようの身体でありながら、なお現役から引退しようという気は起きなかつたのでしょうか？当人はともかく、周辺の心ある人々は、そういう健康状態である安倍氏が今秋の総裁選に立候補することを思い留らせようとはしなかつたのでしょうか？自民党の総裁とか総理大臣というのは病人でもつとまる程、気楽で責任のない地位と思われているのでしょうか？

千代の富士の引退ですら、私には遅きに失した感があります。2場所休場して再起を期し、最後の大目標に挑戦したいというのは、単に本人の望みであったのみか、千代の富士を応援する全ての人々の望みでもありました。それにしても、初日貴花田にて、3日目貴闘力にあれ程無惨な敗け方を喫しなければ、本人も周辺も引退の納得がゆかないものなのでしょうか？“燃えつきて”というのは、日本人のセンチメンタリズムにはたまらない刺激のようですが、少くとも私の好みには合いません。

千代の富士には、本場所出場することなく引退してほしかったと思います。また安倍氏には先輩石橋湛山氏の引き際を見習ってほしかったと思います。政治家とか経営者の地位は、適・不適がスポーツのようにハッキリしないとはいえ、社会的責任は限りなく重かつ大だからです。大学学長も同じこと、“燃えつきて”交替するなど、とんでもないことです。だから私は就任以来、引き際のことが毎日念頭を去りません。

各 位

いたずらにすまじきもの

野 田 一 夫

本学も学内に就職相談室を設け、専任のスタッフが就職戦略を練る時期が来ました。この数年大卒者に関しては異常の売り手市場がつづいているとはいえ、私どもは決して気を許してはいません。学生たちを望み通りの会社に就職させることより、入社後会社が彼らに対して真に満足してくれるかどうかを真剣に心配しているからです。

何しろ、過去1年余りマスコミによって高められた多摩大学の知名度と世間的評価・期待は、私どもの予想を遙かに上回っています。私どもが設立に当って掲げた理想や理念は、世間ではすでにそれが現実だと受けとられているのです。たまたま手元に送られてきた経済誌『財界』も6ページの大型記事「大学を経営する時代が始まった」の中で、慶応の新学部とともに徹底して多摩大学をマークし、とくに本学は「卒業生の品質保証してくれる」とまで報じてくれています。

本学の知名度・評価が高まったことは、就職先の開拓にはどれ程有利かわかりませんが、先方の期待が大きいだけに、就職したあとの卒業生のことは、なお更気にならざるをえません。下手をすると、その反動が2期生・3期生の就職にもひびきかねないからです。そこで本学ではとりあえず、卒業証書(ないし見込書)と推薦書をはっきり区分するつもりです。大別すれば、前者が学力の保証、後者が人物の保証ですが、わが国の大字では慣習的に、学生の就職に当っては、かなりいい加減な仕方で両者を乱発してきました。

本学が学力の修得結果に厳しいことは周知の事実ですが、講義のほかに近く就職講座を開講し、社会人としての心構えから礼儀・作法に至るまでを教育した上で、納得できない学生にはいたずらに推薦書の発行はすまじきものと思っております。

アスペンを想う

各 位

野 田 一 夫

最近、財界人による相次ぐ政治家批判が政治家側の強い反撃にあって、マスコミの話題となっています。近く産業界に卒業生を送り出す筈の多摩大学としては、財界こそ広く国民の尊敬と信頼を得るリーダーを育ててほしいと念願するのみです。それについても想い出されるのは、米国のアスペン研究所です。

19世紀後半コロラド州で発見された銀が生んだこのプーム・タウンは、20世紀前半には完全なゴースト・タウンと化しましたが、20世紀後半には、美しいロッキー山脈の自然に憧れる人々を季節ごと全米いや全世界から集めて賑っています。しかし、アスペンの名を高からしめているのは決してスキーや場ではなく、実は世界に比肩するものない知的生産の場なのです。

アスペン研究所の生みの親は、シカゴの実業家ウォルター・ペプキーです。卓越した教養人であった彼は、第2次大戦後アスペンを保養地として再開発するに当り、是非ともそこに、知的・文化的雰囲気を加味しようと思いつたち、私財を投入し、友人達を説得して独特の目的と教育方法の研究所を設立しました。

政・財界のみならず官・学・労・マスコミ等社会のあらゆる分野でリーダーの立場にいる人々に対し、相互啓発を通じて真にリーダーとしての自覚と素養を身につけさせること、これがこの研究所の設立以来の目的です。そのためにそこでは①好んで古今の文学・思想の名作を知的会話の材料とし、②ごく小人数の参加者がテーブルを囲んで徹底的に語り合い、③そこから導き出される、あるいはその間にひらめくさまざまな貴重なアイディアを参加者がそれぞれに持ち帰り、現実的諸問題の好ましい解決に積極的に役立てようというわけです。

アスペン研究所の成功は、“一般教養”が学生より功成り名遂げた大人たちにこそ真に有効なことを示してくれます。

時代は“多摩紀”

各 位

野 田 一 夫

朝日新聞朝刊の連載「はたちの実験都市——多摩ニュータウン」は今週終了しました。講談社刊の総合雑誌『NEXT』も6月号で多摩ニュータウンを特集しています。総面積3,000ヘクタールに及ぶわが国最大のこの新都市開発は、都市計画決定後4半世紀にして、やっと全国民の注目を集めるだけの体裁と内実を整えるようになりました。

この多摩ニュータウンにある本学は「多摩ニュータウンにある多摩大学」ではなく「多摩大学のある多摩ニュータウン」を設立時のスローガンに揚げました。子供じみた氣負いと受け止められるかもしれません、われわれは本気でそれを目ざしてきたのです。開学後2年余り、やっと世間はわれわれのスローガンを、たわいのない自負とは受けとらなくなりました。

来年は多摩大学にもいよいよ4年生が登場し、われわれの期待を担った1期生が就職受入れ先の人事担当者の冷厳な評価を受けることとなります。だからこそ関係者は目下、来年度の「学校案内」の編集・制作に知恵と努力を傾けているのです。そのキャッチフレーズは「大学史は遂に多摩紀に突入した」というユニークかつ訴求力のあるものです。もちろん、ユニークさと訴求力とは単にキャッチフレーズだけではありません。

大学史を世界史になぞらえ、戦前まで一部特権階級のみが大学へ進学していたのどかな時代を古代。戦後“大学信仰”に群がる善男善女に対して心なき学校経営者や教授が“免罪符”もどきに卒業証書を乱発し、宗教の堕落のごとく教育の堕落を招いた時代を中世。……その後、国家財政と行政権力を背景として国立大学がのさばった帝国主義の時代が終わりを告げ、今はのぼのと新しい時代——“多摩紀”が多摩大学によって拓かれようとしている、ざっとこんなコンセプトです。乞ご期待！

夏休みの勧め

各 位

中 村 秀一郎

学生諸君！いよいよ6月、夏休みは近い。心に残る夏休みを過ごすには、何といってもそのメインテーマを持つことだ。たとえば、本当の日本を知り、その強さの根源、ものづくりの現場に学ぶといったことはどうなのだろうか。それには、世界一流の中小企業を訪問しその実態に学ぶことをお勧めしたい。

まず地域の設定。文句なく長野県。夏に涼しい高原地帯であるとともに先進型ハイテク企業の集積地であるからだ。そこで、須坂市に近い高山村に本社をおくアキタを訪ねる。南志賀の9万平方メートルをこえる原野のなかに自前の技術開発による多角的な生産拠点——鋳造による門扉、セラミックスのパーツ、きのこの改良によるバイオ食品、高性能コンクリート製品の生産——が設置されている。つぎに長野市川中島のコヤマという鋳造品メーカー。3Kそのものといわれる鋳造工場を、多くの創意工夫によってクリーンにし、工場公園を実現している。

ここから中央線経由で伊那に向かう。ここでは伝統的な地場産業から生れた食品工業に眼を向けよう。杜氏といわれる熟練肉体労働依存を脱却し、進んでコンピュータ、ロボットを大幅に導入し、“サケトロニクス”を実現した仙醸というメーカーもあり、また天日乾燥による寒天製造を工業化、良質の寒天を造り出すだけでなく、バイオテクノロジー最先端分野で利用される高純度寒天づくりに成功したメーカーもある。

これらの企業を訪問し、経営者からそれぞれの事業の説明を、それに賭けるロマンとともに聞くことは何と素晴らしい勉強だろう。勉強させて頂く以上、なにかおみやげも必要だろうか。私なら作業服を持参し、まる一日会社の仕事を掃除でも何でもお手伝いするだろう。そのことを通して経営者の話を、諸君はより深い次元で理解できるようになるに違いないからだ。

地域からみた企業者活動
各 位

中 村 秀一郎

6月1・2日東北大学で開かれた、本年度組織学会大会での新しい試みであるセッション（ミニシンポジウム）にディスカサントとして出席してきました。

その標題は「地域からみた企業者活動」、報告者は大滝精一（東北大）金井一頼（北大）金井壽宏（神戸大）の三氏、第一線の有能な研究者というふうにふさわしい人々で、討論には私のほかにベンチャー経営者柳田一千一氏が参加されました。

三氏の問題提起を聞いて、私はある種の感慨にふけらざるをえませんでした。それはこの方がその大学の立地する地域社会に根ざすイノベーター中堅企業群をケースとしてとりあげ、それによって地域社会活性化のための理論假説を追求されていたからです。経営者の伝統といって良い、ヨコ書き文献をタテに変えることが学問だった時代がようやく終わり、欧米の大学なら珍しくない、大学と地域社会との交流が優秀な研究者によって開かれつつあることを実感できたからです。

15分という限られた時間で密度の濃い主張をするために報告者は、レジュメに注目に値するキーワードを示していました。情報創造、知識の苗床、社会的企業家（Social Entrepreneur）、地域産業機会マップ、地域産業間シナジー、企業家ネットワーク・アライアンス・戦略的提携等々です。

私のコメントは、地域に根ざす企業家活動の現代性を問う問題提起でした。すなわちわが国に多い伝統型の地場産業における企業家はその地域集団から生まれ、その集団に衝撃を与えたのに対して、今日の企業家活動は脱地場産業型、一業一社型です。だからこそこれらの企業家の地域革新に果たす役割は、わが国独自の展開というべき異業種企業交流のリーダーとしての活動となるのは、ごく自然の成り行きというべきでしょう。

3種類の卒業生

各 位

野 田 一 夫

今や世は就職戦線だけなわ。大学卒業生の異常な“売り手市場”は今でもつづいていますから、いわゆる一流校の卒業生に関しては、大勢は今年も夏休み前には決着がついていることでしょう。多摩大学も来年には1期生がようやく就職活動の時期を迎えます。本学でも早々と学内に「就職相談室」をもうけ、たくさんの資料をとり寄せ、人手のない中で会社廻りまでやっていますが、「それにしては、3年生の就職への関心は今ひとつ真剣味が感じられない」と山田就職課長の嘆きです。

私はそんなことを全然気にしていません。なぜなら私は、1期生と限らず本学の卒業予定者に関して、大学が過度に就職の面倒を見る必要はないと考えているからです。どこの大学でも、卒業予定者には大別して3つの種類があります。①卒業後の身のふり方がすでに決まっている者（親の仕事を継ぐとか結婚を前提に家事手伝いをするとかいったケースも含めて…），②学校に頼らず自分自身で就職先を開拓する者（両親・親戚・先輩等の強力なコネを期待できるケースを含めて…），③学校（または教師）の協力・助言のもとに就職先を探す者、の3つです。

“就職活動”を必要とする者はこの中③だけです。本学1期生の卒業予定数は留年等を勘案すればせいぜい200名ですから、就職活動の必要な者は100名にも達しないでしょう。近いうちに私は、この100名にアピールし、就職に関する多摩大学としての協力・助言のあり方を、徹底的に理解し、覚悟して貰うつもりです。大学の協力・助言を必要とする以上、彼らには当然、単に基礎知識や学力のみならず、是非とも本学の期待する礼儀・作法・態度・物腰・言葉遣い……といった人間的属性までをも身につけて世の中に出で行って貰いたいものです。彼らに対する評価が、今後の多摩大の評価を左右することを1期生諸君には是非わかってほしいと思っています。

東京夢幻図絵 各 位

野 田 一 夫

“カッチャン”こと北村和夫君は、暫く会わなくても暖かい心の通い合う私の大切な友人の一人です。彼のおかげで“雲の人”だった杉村春子さんとも親しくなり、彼が杉村さんの相手役として扮する「欲望という名の電車」なども何回も見に行きました。スタンレー役500回という輝かしい実績にもかかわらず、杉村さんによると「あのひと、せりふを忘れる名人なのが…」という微笑ましい一面をもっています。

その北村君が悪友今村昌平氏の演出で、2時間に及ぶ独白劇をやるという便りが届いた時、私は多少の不安を感じながらも、本学の演劇同好会「ザザンクロス」の連中をひきつれて彼を応援に行こうと決意しました。4月13日の新入生歓迎会の後101番教室で彼らの芝居を観て、痛く感心したからです。先週土曜日の午後、学生10名と渋谷で待ち合わせ、PARCOの“SPACE PART 3”で「東京夢幻図絵」を観ました。

舞台は講演会場の設営、講師の北村君が「B29と私」というテーマで、太平洋戦争末期の東京での空襲下の体験を迫真的演技を随所に交えて生々しく語りつづけるわけです。テーマも時代背景もおよそ観客を魅きつけるのには不適と感じたのも束の間、芝居が始まって5分もすると、われわれはすっかり彼のセリフと演技のとりこになり、息をのみ、笑い、そして感激して時を忘れてしまいました。

万雷の拍手で芝居が終ったあと、学生を連れて楽屋に北村君を訪ねると、舞台衣装のままの北村君は、いつも彼らしい愛嬌のある表情と持前の太い大きい声でよろこび、学生一人一人と固い握手を交わしながら、彼らを激励してくれました。帰りがけ「…やっぱりプロはすげえや…」という学生の声を背に聴きながら、私はひどくいいことをした気分でした。